

寄稿
新島襄研究会へのお誘い

石田芳弘（69年・商卒）
2024年2月

わたしは同志社大学の校友である作家の佐藤優さんの著作・論評を好んで読む。

北方領土問題に絡む“国策捜査”の犠牲になり約1年5ヶ月東京拘置所の独房で過ごしていた時を振り返り「同志社大学で学んだことが私を支えてくれた」と語っています。

また、佐藤さんは自身の著書「同志社大学神学部」で「新島襄の手紙」を読んで、逆に「新島襄先生への手紙」を書き、「特に新島先生が強調された良心はわたしにとって極めて重要な価値です」と述べています。

古希の齢を過ぎてからわたしはこれらの言葉に刺激され、もう一度同志社大学で過ごした4年間を振り返ることにしました。同志社大学と校祖・新島襄先生を学びなおし、自分自身の人生の精神的終活としたいと考えたからです。

まず、昵懇の間柄である校友会愛知県支部長の小栗成男さんに相談、わたしが発起人となり校友会組織内に「新島襄研究会」を立ち上げていただきました。顧問に大島寅夫さん、世話人代表に氏家鉄也さん、そして16人の仲間で22年4月20日に第1回目の勉強会をスタートしました。

まずは能田茂・作画の「マンガで読む新島襄－自由への旅立ち」で新島先生の生涯と同志社設立の過程をざっとつかむことから始めました。

次に「新島襄の手紙」を数回に分けて読み、感想を述べあいました。先生の手紙文は武士階級の教養人の文体であり少々難解な語句に出会いますが、まさに新島先生の肉声を聞くようで幕末から明治初期にかけての日本史の激動期と同志社設立にかける先生の気迫が鼓動の響きのように伝わってきました。新島先生の物語にはいくつかのエピソードがあります。先生のどの場面に心惹かれるかをお互いに話し合うことは我々自身の感性が知れて、熱を帯びた楽しい議論になりました。

研究会が軌道に乗ったころ、大学の正門に立っていた良心碑の話題からわれわれは“同志社の良心”の解釈に行きついたので。そこで一度、大学の良心学センターに行こうということになりました。

昨年12月2日、初冬の京都は穏やかな陽光がきらめき、母校のキャンパスは瞬時に半世紀前と同じ、青春の記憶を蘇らせてくれました。神学館内にて同志社大学良心学センター長の小原克博先生に会うことができました。小原先生のお話しは良心という言葉をめぐる、新島先生は当時の社会通念と同志社の教育理念とのギャップをどう乗り越えたかなど示唆に富むものでした。今後の勉強のために同志社関連の参考書を数冊いただいで帰りました。

また、小原克博先生が今年度から大学長に就任されることを聞き、是非一度校友会愛知支部へお出かけいただきご講演していただくことをお願いしておきました。



校友の皆さん！

われわれの人生の中にキラキラと輝く自由への旅立ちを用意してくれた新島先生と同志社大学についてもう一度語り合おうではありませんか！

新島襄研究会にご関心のある方は下記連絡先にご一報ください。次回の開催のご連絡差し上げたく存じます。

■連絡先：代表世話人 氏家 鉄也（平成9年商卒）

ujibon.com@gmail.com

*ご入会後の連絡は、できるだけLINEグループへのご登録にご協力をお願い申し上げます。

■入会にあたってご確認いただきたいこと

例会の参加にあたっては、事前に課題図書を通読いただき、その感想をご用意いただきます。特に事前にレポート等の課題を提出いただく必要はありませんが、新島襄や同志社について、一定の学習意欲をお持ちであることが条件となります。